

執筆者紹介

望月^{もちづき}清司^{せいじ} 本研究所研究参与

〈編集後記〉

望月清司参与の「価値形態論の上着は30万円」をお届けします。この論稿を仲介された村上俊介所員より、ぜひ「編集後記」執筆をとの希望があり、今回はそれを了解。以下は村上所員によるものです。

もともと望月清司先生のこのご論文は、2009年夏に私に送られてきたものだ。先生の主著『マルクス歴史理論の研究』の中国語翻訳出版直前の時期であり、かつ私が先生に長年インタビューをお願いし、やっとお引き受けいただく直前の頃だった（インタビューは社研月報 No.574『望月清司先生に聞く』（2011年4月）に結実することになる）。

その時、先生は「公表はできないが預かっておいてくれ」と言われた。正統派、宇野派、廣松氏らに対する批判を梃子にして、議論がマルクス本人に及んだことをおもんばかられたのであろうとは推測できたものの、私も困ってしまい、先生には社研『月報』への掲載を打診したが、駄目だった。今年になって、また何度目かの打診を試みたところ、思いもよらず先生は首肯され、その後は掲載に向けて推敲を繰り返された。

この御論文の主要論点は、そもそも『資本論』冒頭の価値形態論は成り立つのか、という大胆な疑問の提示から始まる。まず第一形態「20 エルレのリンネル＝一着の上着」にしてから、両辺ともにどんな品質かよく分からない面妖なシロモノであることのみならず、相対的価値形態の側（リンネル）は、等価値形態側（上着）を自分の価値と同等な価値の相手を選んで「出来レース」ではないか。さらに第二・第三形態で登場する茶とコーヒーは、一定の生産・交換ゲマインヴェーゼン外部からもたらされた、終身束縛的労働や奴隷労働の所産であって、そもそも価値比較の等式に登場する資格がない。では第三・第四形態における「金」はどうか。「新産金は、それに投下された労働時間とはぜんぜん無関係に、地球の上にとまった金累積から決まってくる現在金価格からコミッションを引いて買い取られるほかない」（本文引用）モノで、そもそも価値形態論の論理的帰結として金貨幣を登場させるべきではなかった。これが歴史家でもある先生の結論でもあった。

こうした価値形態論そのものへの疑問から、最後に先生は、新自由主義的な経済理論に対抗しうる資本主義論を展開するとすれば、「単なる公憤や同情からだけの告発にとどまらない筋道を明らかにできるのは、「現実に眼を据え、理路がすっきり通る、新しいマル経」しか今はないだろう。これだけは譲れない「働く者は人間の尊厳をもって生きる権利がある」という命題を明らかにするテキストの出現をひそかに待望している」（本文引用）と結ぶ。

望月先生のご業績は今年6月の経済学史学会の共通論題で、戦後社会思想を画する三つの高峰の一つとして選ばれたことをここに追記し、今後ともどうかご自愛なされんことを願う。

（村上俊介）

2018年10月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

（発行者） 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
